

「国家の魚道管理方案のシンポジウム(於:韓国)」参加報告

リバーフロント研究所 主席研究員 渡邊 茂

1. はじめに

韓国において昨年11月23日(水)に「国家の魚道管理方案のシンポジウム」が開催され、日本から中村俊六先生とともに渡邊が参加し、「日本における魚がのぼりやすい川づくり」と題して発表を行うなどの技術交流を行いました。遡ること約3ヶ月、8月31日(水)に日本で開催されたJRRN*河川環境ミニ講座「韓国と日本の魚道整備」において、Kim Jin-Hong教授(韓国・中央大学)と当センターの小川豪司研究員(当時)ほかの交流があったご縁で、このシンポジウムの参加依頼をいただいたものです。

* JRRN : 日本河川・流域再生ネットワーク

2. シンポジウムの概要

このシンポジウムはサブタイトルとして「内水面の水産資源及び種多様性の保全のためのー」と銘打たれ、内水面の水産資源の保護・増強及び河川の生態系の健全性を高めるために、国内・外の魚道管理の現況を把握して韓国全域の魚道に関する総合的管理政策を模索することを目的としたものです。

日 時：平成23年11月23日(水)14:00~18:00
場 所：ソウル教育文化会館
主 催：韓国農漁村公社、国立水産科学院(韓国)
後 援：農林水産食品部 (韓国)
参加者：約200名(専門家,行政,団体,報道など)

全体は3部構成となっており、第1部では、Park Jae-Soon韓国農漁村公社社長より開会の辞、Kim Young-Man国立水産科学院院長より歓迎の辞、Shin Sung-Bum国会議員、Lim Kwang-Soo農林水産食品部室長より祝辞が述べられました。このテーマについて韓国の行政機関が多数関係していることや、韓国社会における関心の高さが窺えました。

第2部では、両国から5件が発表されました。

- ① 全国の魚道現状と魚道管理の方案
Jang Kyu-Sang(農漁村研究員主席研究員)
- ② 日本における魚がのぼりやすい川づくり
渡邊茂(リバーフロント整備センター)
- ③ 全国の魚道設置優先地点と魚道の効率的な管理方案
Park Jae-Cheol(国立金烏工科大学教授)
- ④ 魚道設計の要諦
中村俊六(豊橋技術科学大学名誉教授)

⑤ ドクチョン川の魚道現状及び問題点

Min Hyung-Gyu(慶尚南道山清君係長)

日本からの発表として、渡邊から日本の法河川の区分、多自然(型)川づくり、魚がのぼりやすい川づくり、自然再生事業など20年余りの取り組み経緯を紹介し、中村先生は「魚道だけでなく魚道システムを設計すべき」「設計で大切なのは流れの速い遅いよりも寧ろ休憩場所である」と熱弁をふるわれ、活発な質疑応答がありました。

「魚がすみやすい」川への取り組み

平成2年度 「多自然型川づくり」をパイロット事業として開始
平成2年度 「河川水辺の国勢調査」開始
平成3年度 「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業」開始
平成7年度 「河川生態学術研究」開始
平成9年 河川法改正 法の目的に「河川環境の整備と保全」を追加
平成10年度 「自然共生研究センター」での研究開始
平成14年度 「自然再生事業」創設
平成17年3月 「魚がのぼりやすい川づくりの手引き」

発表内容の一部

第3部では総合討論として、Joo Gea-Jae釜山大学教授をコーディネーターとして、パネラーにKim Jin-Hong中央大学教授はじめCho Hong-Subハンギョレ新聞社環境専門記者、Kim Jin-Kyu韓国土俗魚保存協会会長や関係行政機関(韓国環境部、農林水産食品部、国土海洋部、全羅南道長興君、国立水産科学院)が登壇し、パネルディスカッションが行われました。行政機関の司令塔が必要、魚道だけでなく川全体を見るべき、地元にあった魚道を、等々の白熱した議論が行われました。

3. おわりに

今回は魚道を主なテーマにした韓国との技術交流でしたが、河川・流域再生など幅広い分野における両国の技術交流が行われることが期待されます。末筆ながら今回の技術交流にあたり、JRRN及び韓国農漁村公社の皆様大変お世話になりましたので、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



シンポジウム会場における発表の様子